

BONJOUR

ボンジュール



vivement
ヴィヴモン

vol.27 2014.12.15 発行

ASSOCIATION NIIGATA-FRANCE

- 発行 新潟・フランス協会
- 新潟市中央区東堀通6-1038(丸屋本店内)
- TEL・FAX 025(225)2424
- <http://anfrance.com/>

新潟・フランス協会パリ支部、新潟日報社国際交流拠点欧州事務所開設1周年記念式典の開催を目的としたフランス訪問が9月22～28日に開催され、その一人として参加させていただきました。一行は新潟・フランス協会の本間彊会長はじめ協会の皆さんと、当社の小田敏三社長ら関係者総勢約30人です。

パリ到着の翌23日が早速メインイベントの開設1周年式典でした。会場は宿泊したエッフェル塔近くにあるノホテルホテルのバンケットルーム。本格的なしつらえの茶席や協会パリ支部会員の芸術家の皆さんの作品展示など、新潟やパリなどに暮らす県人の皆さんらが協力して一体感のある空間をつくられていました。

パリ支部の会員の方々ら約30人も参加し、60人ほどが集まった式典は、パリ支部長で当社国際交流拠点事務所代表・原田哲男さんらのあいさつの後、新潟市を拠点に活動する三味線プレーヤーの史佳さんと、高橋竹育さん親子らの記念演奏が披露されました。セース川を臨む大きな窓を背に設けられたステージ。演奏に合わせて街並みに沈む夕日が差し込み、会場は幻想的な雰囲気に包まれました。また、史佳さんが披露した軽快なオリジナル曲で場がいつそう盛り上がり、参加者が打ち解け、続く夕食会は懇親がより深まったのではないのでしょうか。新潟とパリの結びつきの深まり、広がりを感じました。

自由行動の一日を置き、ツアーは最終目的地のナントを目指し、バス移動です。25日はパリからトゥールまでの約240*。途中、ロワール川沿いにあるシャンボール城、シュノンソー城、アンボワーズ城と三つの古城を見学しました。ユネスコの世界遺産に登録されている建物など歴史を感じさせる建築のほか、広大な大地を

走るバスの車窓に突然、現れるのどかな雰囲気の小さな町や村々…。大都会のパリとは違ったフランスに触れることができました。

26日は約220*。を走り、昼ごろにナントに到着。ナントは昨年、協会パリ支部、当社国際交流拠点の開設のためフランスを訪れたのに続いて2度目でした。雨模様の天候だった前回と違って、青空が広がり、街の印象が明るく感じました。歴史を感じるレストラン「シガール」で、アトランティックジャボンの方々を交え皆さんと食事した後、ナント市表敬。市庁舎では国際交流担当のカリン・ダニエル副市長がカクテルパーティーで歓迎してくれました。

ナントで過ごすこの日がフランス最後の夜です。皆さんと出掛けたレストランは、階段をぐるぐる周るように上り、通されたフロアに出ると、大げさにいうと空間が歪んでいるように感じました。皆さんも同様に違和感を持たれたようでした。原因は建物の相当な傾きでした。これも海外ならではの思い出です。出される食事に不安もありましたが、味は問題なく和気あいあいと、楽しませていただきました。

27日はかつてのナント大公城、ナント歴史博物館を訪れサムライ展の見学。歴史を振り返るだけでなく、日本の漫画や映画「スターウォーズ」に登場するダースベーダーを飾るなど、日本人とは違った視点で「侍」をフォーカスした展示が新鮮でした。刺激を受け日本への帰途となりました。

最後にご一緒させていただいた皆さんに式典をはじめ、大変お世話になりました。ありがとうございました。

新潟日報社 報道部 土田 茂幸

新潟・フランス協会の旅

1991年2月22日、新潟・フランス協会は故松崎文則新潟大学名誉教授を中心に仲間たちと共に設立を果たし、新潟から続く世界に旅立ちました。

設立から幾星霜、今日まで試行錯誤の旅を続けています。振り返ると23年が過ぎもはや四半世紀を迎えます。300名の会員の皆様と共に歩んできた道程は多くの方々のご協力とご支援、加えて幸運に支えられたものでした。数多の活動は会員が中心となり「一市民」としての立場を堅持しつつ、自由、平等、友愛の精神を基に、心豊かに楽しく公正に歩んできました。会費のみで運営する新潟・フランス協会は、会員の皆様の浄財が収入のすべてですので皆様に喜んで頂けるよう取り組んでおります。みんなで旅を続けるには一定のチームワークと、それぞれの個性を尊重する自由な気風、さらに気力や体力などエネルギーが必要です。そんな旅を新潟・フランス協会の会員の皆様と9月22日から約1週間フランスで味わってきました。パリ支部設立1周年記念式典とナント市訪問が目的で、務めを無事に果たしてまいりました。パリ支部のメンバーやナント市のカリーヌ・ダニエル副市长、アトランティック・ジャポン協会の仲間たちと旧交を温める心に残る旅でした。参加して頂いた35名の皆様、関係者の皆様に改めて感謝とお礼を申し上げます。



撮影
本間
強

(2014フランスの旅)

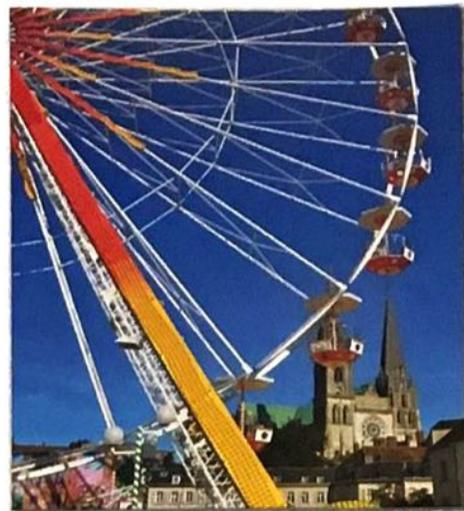
シャルル・ド・ゴール空港から暮れ泥むパリの街中に入ると胸がときめく。パリは言うまでもなく街そのものがアートなのだと思う。とあるカフェでクロワッサン・カフェオレのプチ・デジュネもパリジャンのような気持ちにさせてくれる。

パリからナントへチャーターバスで行く。この手配は正解

だったと思う。パリからナントまでの途中、ロワール川に沿って中世の時代を彷彿させる古城巡りが計画されていた。

シュノンソー城やアンボワーズ城などため息が出る美しさだった。そして最新鋭のトラムが走るトゥールの町で1泊しナントに向かう。パリの魅力もさることながらフランスの田舎は自然が美しく居心地もすばらしい。姉妹都市・ナント市では新潟に帰ってきたような安心感に包まれる。その後、バスはシャルトルに立ち寄り大聖堂を見学した後、一路空港を目指す。バスの中で思い思いに語り、笑い、眠り、車窓の景色を楽しめるのはバスならではの旅だと思う。何よりも同じ釜の飯(パン?)を食べ、式典のために共に働いた仲間たちとは毎日に連帯感も強くなってゆく。それがこの旅のいちばんの収穫だったのかもしれない。パリ～ロワール川古城巡り～トゥール～ナント～シャルトル大聖堂～シャルル・ド・ゴール空港へとすべて同じバスで巡った旅。TGVと違いこんなに荷物の持ち運びが楽な旅はなかったと思う。次回は同じようにバスをチャーターして、パリからモン・サンミッシェルへ行き、近くのサン・マロで泊まりナントに入るのもいいのかな、などと勝手な想像を膨らませているこの頃です。やっぱり旅は楽しい!! 様々な活動を進める新潟・フランス協会の旅はまだまだ続きます。

Bon voyage! ボン・ヴォヤージュ・・・



会長 本間 強

新潟・フランス協会パリ支部

2014年9月23日、パリのノボテルを会場として「新潟・フランス協会パリ支部設立の1周年、新潟日報国際交流拠点欧州事務所開設の1周年」記念行事を行いました。新潟・フランス協会本間会長一行、新潟日報小田社長一行、三味線的小林史佳さん一行を加えて、34人でお越し下さいました。パリからは、パリ支部会員に加えて日本大使館の加藤淳文化広報部副部长様他2名様で24人、総勢58人での賑やかな式典に成りました。

記念コンサート、お茶会、ミニエキスポと皆様の協力で大成功で終える事が出来たと思っています。

まず、パリ支部では情報交換を主に考えて活動していますから、二か月毎に一度位集まって、懇談会を計画しています。

パリ支部は小さな会で未だ23人程の会です。パリ支部は特に美術関係者、音楽関係者の皆さんが圧倒的に多い様です。パリの特徴かと思えます。そんな事も有り、今回の1周年記念式典には皆さんへの歓迎の意味を含めましてミニエキスポを企画しました。此の方も大変良い評価を頂きました。

昨年6月のパリ支部発会式以来の活動を簡単に振り返りますと—
新潟からお出でになる皆さんへの激励等。

2014年4月15日には湯沢町主催の童画展がパリ日本文化会館で行われ、会員の皆さんからオープニングレセプションに参加して頂きました。

昨年2013年9月、燕三条地場産業センターがMaison et Objetにスタンドオープンをされました。

同じ9月末、ヴァンセーヌの森の中に有る会場で、トウキョウ クレイジー カワイイ パリでは新潟のスタンドが出店され、此れも燕三条の技術が紹介されていました。新潟ガールズのお二人を含めて3人を元気づける為にスタンドを訪ねました。

他には、11月には 栗拾い、そして 藤田嗣治のアトリエ訪問。

新年1月には新年餅つき会。

あったか雪募金への協力。400€程を新潟県共同募金会に送りました。

2014年4月5日にはピアノ、成嶋志保さん、歌、浦田典子さんのコンサートを国際学生会館の日本館で、日本大使館、新潟・フランス協会パリ支部の後援で実現しました。

新潟日報国際交流拠点欧州事務所としての活動は—

昨年9月頃から横の繋がりを作ろうと考えていまして、ロンドンから国際交流拠点ロンドン事務所長の飯塚さん、今年の3月には、サンパウロ新潟日報国際交流拠点事務所長、鈴木さん一行、同じくニューヨーク新潟日報国際交流拠点事務所長大坪さん一行がパリにお出でになられ、交流歓迎会をしました。

その他には、新潟・フランス協会パリ支部会員の持ち回りで、グローバル新潟への投稿参加をしています。

少しずつではありますが、会員数も増えつつあります。これから新潟・フランス協会本部と協力してより充実した会に出来たらと思っています。

パリ支部長 原田 哲男

日本茶のお点前披露

9月23日(パリ)
開設1周年記念式典にて

今回のコンセプト

- ①パリ支部、日報社欧州拠点1周年のお祝い
- ②フランス文化に敬意を表しつつ、フランスに因んだ道具組
- ③新潟の素晴らしさを知っていただきつつ、かかわって下さった方の繁栄と健康を祈りながら、協力でできて楽しかった、良かったと記憶にとどめていただくこと

組んだお花とお道具について

■お花：7種 (ホテル近辺で 当日朝30分ほどで採取)

- むくげ・あきざり(しその仲間といわれるセージの一種)・金糸梅(オトギリソウ科)・斑入りススキ・斑入りヤブラン・あけぼのフウロソウ・野ばらの実

■お道具(会記より)

- 軸 「忠」(日の本の大和の国のその民の誠の力、ためす時来ぬ)

—新潟の誇る文化人、相馬御風の書。設立1年がたったパリ支部、欧州拠点が更に尽力して発展して下さることを念じ、お祝いの気持ちを表す。

- 花入れ 籠(灯台)

—これから更に発展してゆかれるパリ支部、欧州拠点の先を照らすための明かりとして。

- 香合 「靈芝」(江戸時代 加賀蒔絵)

—香は集中力を高めるために炭にくべる香り。香合はその香のいれもの。靈芝は別名：サルノの腰掛。健康長寿のきのこといわれています。

- 茶杓 べっ甲

—亀は万年といわれるように参加者、会の長寿を願って。

- 鉄瓶 南部鉄瓶フランス仕様

—パリで人気の鉄瓶。江戸千家の襷紗の紫、濃黄の建水の色も考慮して紫を使用。

- 茶碗 主：当代 楽 筆洗(南フランス アルビニャックの土を使って)

—2007年 佐川美術館監修の傍ら、自身の作風は自身で築くという慣わしの楽家の意向を汲んで作製。

替：瀬戸 筆洗(桃山時代)

替：鉄絵 筆洗(上越 2代齋藤陶斎)

—フランスのランボーやベルレーヌの詩に散見されるように、おなじ韻を用いて、美しさをあらわすことに因んで同じ筆洗形を使用。

お菓子(丸屋本店製：満月の形の半生菓子、四国の岡田製糖所製和三盆糖を含んだウサギの干菓子)

ご協力、ご関係者の皆様には感謝しております。

パリ支部 会場担当のサルモンゆりかさん

軸を掛ける床の間を作製下さった 清水伸パリ支部副支部長

お点前担当 広瀬秀さん、地濃令子さん 他関係者の皆様

何より関わって下さった皆様が、楽しかったと言って下さったのが良かったです。

江戸千家越後支部長 鈴木宗裕





フレンチ・クルーズ

2014年9月20日(土)

18:30過ぎ、シャルルドゴール空港に到着。土曜日に雨が重なった大渋滞で、オペラ座までのリムジンバスがなかなか進まない。歩いて行けるはずだったホテルまでタクシーに乗る。誤ってキャリーケースを後部座席の革のシートの上に積みそうになって、運転手に本気で怒られた。彼の清潔な愛車で大事な商売道具である。運転手に空港からのリムジンバスの料金を聞かれた。「10€だよ」と答えたら、「タクシーだと50€、リムジンは安いな」と嘆いていた。ホテルに着くとメーターを上げられた。疲れていたけど「料金が上がった」と文句を伝えたら「パリでは最低料金が決まっている。パリは高くつくんだ。」と言われた。後で見たらタクシーの最低料金のことは日本の旅行ガイドにも書いてあった。

9月21日(日)

今日は「ヨーロッパ文化遺産の日」(毎年9月の第3週末)で、名所旧跡が開放されている。私は一般公開に先駆けて特別プレオープンされたピカソ美術館へ足を運んだ。作品が完全には配備されていない改装されたばかりのピカピカの美術館で『洗面室の女性達(Femmes à leur Toilette)』などを見た。見学に来ている人たち(いろいろな国の、カラフルな洋装で)それ自体がピカソの作品群のように見えた。

フランスのニュースは、直前に政界復帰を発表したニコラ・サルコジ前大統領の話題で持ち切りで、夜にはインタビュー特番があった。この話題は大々的に繰り返し報道されていた。

•ピカソ美術館:5 rue de Thorigny 75003 Paris

9月22日(月)

朝から「ラデュレ」へ行き、たっぷりとメープルシロップとバターを付けてフレンチト



スト(Le Pain Perdu)を味わった。

ホテルの部屋に無造作に置かれたパリの情報誌で、「ニキド・サンファル(Niki de Saint Phalle)」の展覧会のことを知った。掲載されている作品に惹かれたのと、街中あちこちで彼女の展覧会の広告を見かけたのもあってグランバレまで見に行った。開館直後から行列で、30分以上



待って中へ入った。絵画・写真・造形といろいろな彼女の作品が見事に並んでいた。一番楽しかったのは代表作「ナナ」の展示。女性の体を大胆にデフォルメした巨大な女人像が何体もクルクル元気に回っている空間にいて、遠き日本の女性躍進の夢を見た。

夜は、5区のビストロでバスク地方の料理を食べた。非常に美味しくおススメ。

•「Ladurée Royale」 16-18 rue Royale 75008 Paris

•「Niki de Saint Phalle」(ニキド・サンファル展) 2015年2月2日まで

Galeries nationales du Grand Palais, 3 avenue du général Eisenhower
75008 Paris

•「Dans les landes... mais à paris」 119 bis, rue Monge 75005 Paris

9月23日(火)

新潟からグループが到着した途端今までに増して太陽が輝いて青空が広がった。朝から現地の日本人ガイドさんが付きっきりで観光コースをバスで散歩。シャイヨ宮から望むエッフェル塔、コンコルド広場、セヌ川を挟んでルーブル美術館とオルセー美術館、川沿いに並ぶ古本屋街、ノートルダムを左手に見ながら左岸へ渡り、リュクサンブール公園を通って、サン・ジェルマン・デ・プレ教会を横目に右岸へ戻りオペラ座まで。解散後は、自由散策。シャンゼリゼ通りの街路樹がもう紅葉しているのかと思ったら、大気汚染のせいだと説明された。

余話

ガイドさんが、観光客に群がるジブシーのスリ被害から私たちを守ろうと徹底指導して下さった。少女達が3人組位になってアンケートか何かにかこつけて観光客に近寄ってくる。しつこく迫ってきて問答しているうちにやられる。そういうスリ達がいる

ことを知って注意してほしい、日本に帰って呼びかけてほしいとのこと。

ガイドさんが最近では若いガイドのなり手がなく、引退したいような自分がいつまでも忙しいとおっしゃっていた姿が気になった。

9月24日(水)

パリ自由行動の日。初めて組は、ルーブル・オルセー両美術館をはしごして見学したり、ベルサイユ宮殿まで足を延ばしたり、パリ何度も組は、映画「アメリ」の舞台巡りやモンサンミッシェルの日帰りバスツアーに参加したグループも。食事もブラスリーから日本食までグループ十色で楽しんだもよう。好天のフランスがツアーを後押し。

9月25日(木)

いよいよロワール地方古城巡りへ出発。シュノンソー城とアンボワーズ城だけの予定の冒頭にシャンボール城を追加してもらった。

■シャンボール城

そのシャンボール城、正面からのお堀越しの全貌が圧巻なのに残念ながら現在長期修復工事中。正面寄りのシャッターポイントを見つけるのに苦勞した。でも光を浴びたお城の陰に教会を見つけ、その鐘の音が私たちを出迎えてくれたような気持ちになった。



■シュノンソー城

そろそろお腹も空く頃、シュノンソー城に到着。滞在制限時間内に見学か昼食か迷うところ。ブラスリーが大行列でレストラン「オランジュリー」へ。カーブ(地下ワイン蔵)の間の小道を抜けるとまたかわいらしい中庭があってその奥に落ち着いたレストラン。装飾もお料理もサービスも最高に心地良かった。旅先のお手洗いに不安がないのありがたい。ブラスリー組のハマやボテにも舌鼓…その後は時間いっぱい、城内を駆け巡る。回廊の格子模様がかっこいい。城内から眺める庭園の花々も美しい。お城巡りは、お花のある季節が絶対にいいと思う。近くの「シュノンソー駅」から電車の音。慌ただしくも口福を得た見学だった。

庭園の花々も美しい。お城巡りは、お花のある季節が絶対にいいと思う。近くの「シュノンソー駅」から電車の音。慌ただしくも口福を得た見学だった。

■アンボワーズ城

高速道路を進むバスからの単調な景色の合間にふとコスモス畑と目が合った。まるでコスモスが私たちを拍手で出迎えてくれているような。カメラは間に合わない。お城に向かうロワール川沿いにはためく旗々の彩りもおしゃれに見える。旅の気分が盛り上がり全てを肯定したくなる。バスから降りて歩いてお城へと向かう。小さな田舎街という雰囲気。たくさんの観光客が通りのテラス席で日差しを浴びて寛いでいる。お城は丘の上に立ち、見降ろすと川を中心に橋が架かり家々が並んだ町並みにみんなのカメラ時間が止まらない。気分もお天気も上々で、気付けばみんなが笑顔。城内は、歴代王の暮らしぶりが細かく再現されている。先のお城に比べて規模は小さいが階段はたくさん。お庭にはレオナルド・ダ・ヴィンチのお墓。この絶景に「いつかはここに眠りたい」という声も…。お城からバスまで寄り道が多く前へ進まない。興奮と暑さでアイスクリームが大人気。

■トゥール

本日最終目的地、宿泊地のトゥールへ。ホテルはトゥール駅の真裏で便利。中心部は散歩できる程度の大きさながら最先端のトラムが走っていてつい乗ってしまう。未来の乗り物のような宇宙的デザイン。夕食は鍋いっぱいのもう貝を食べたグループ、伝統田舎料理を食べたグループ、部屋食をしたグループ、自由時間を思い思いに過ごし、何をしても楽しい旅先での食事。

9月26日(金)

朝からサンガシアン大聖堂まで散歩した人々もいる。名残惜しいトゥールを後にし、大西洋側の街ナントへ。夏の名残りのキラキラとした陽気で、クレヨン通りを歩いて昼食会場「ラ・シガール」へ向かう。セミがシンボルの大繁盛の店内でこちらも30名を越す団体で大賑わい。シャンパン、生ビール、ワインが進み、ゴロゴロの厚い

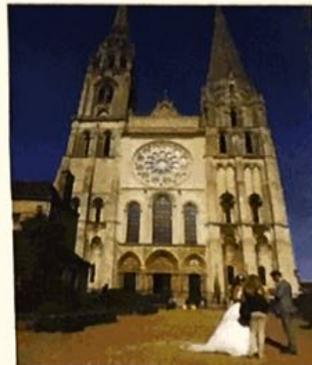


お肉も胃にグイグイ吸収されていく感じ。デザートはクレームブリュレは想像を絶する大きさとフランス人の胃袋には叶わない。市庁舎での三味線披露から歓迎パーティ、(胃が)休む暇もなく旅の最後の夕食会場へ。生ビールやワインが喉を伝う。お肉もまだ美味しい。こちらの習慣に体がなじむ頃、最後の宴。

9月27日(土)

午前中は、ブルターニュ大公城へ。館長様のご案内で「Samurai(サムライ展)」を見学。繊細で詳細な展示と説明の数々に圧倒された。日本の武士の歴史と文化、その背景の芸術、現代に至る進化まで、鎧姿に迎えられる仮面ライダーに送り出された展覧会。フランス人がこんなに勉強してくれていることが嬉しい。ローマ字表記の歴史が自分にも読みやすく、逆輸入してほしい展覧会だと思った。お城の中庭で三度史佳さんの三味線を聞く。サムライ展へ向かうナントの人々の足が止まる。フランス人が三味線を聞いて待てる。日本人がフランスで日本の歴史を学ぶ。学ぶことに国境はない。その後は、ラ・マシシ見学組と買い物組に。最後のひととき、余念がない。

正午、お土産で膨れ上がったスーツケースをバスへ積み込み、パリ・シャルルドゴール空港へ向けてナントを出発。途中ドライブインに加えて運転手さんの法上の休憩時間のため世界遺産「シャルトル大聖堂」に立ち寄る。バスが近付き、その高い尖塔が見えてくると興奮が増す。真っ青な空の下、ロマネスクとゴシック様式それぞれの鐘塔を備え堂々とした大聖堂へと足がはやる。中から見上げるとバラ窓の青色のステンドグラスが想像を超えて美しい。



うっとりして外に出ると花嫁花婿姿のカップルが大聖堂を背に写真撮影中。その後クラクションを鳴らして走る騒々しい車の音があり、馬車の上にカップルの姿を見た。本物のウェディングまで見物できた。

高速道路でドゴール空港に近付いて、もう立ち寄ることのできないエッフェル塔やサクレクール寺院を遠くに眺め、パリの空にさようならをする。帰ったら今度はフランス語を勉強し直そう、そう思ってバスを降りる。

会報委員 田中 希世子





Tisse Métisse France

フランスところどころ

金子麻里

Tisserは「織る」、Métisserは「(種の違うものを)混ぜる、あわせる」という意。

フランス人はなぜ私に尋ねるのだ問題

シャルル・ド・ゴール空港に着くと、RER(郊外線)でパリ市内に入ることが多い。ちょっと前まで窓口しかなかったのだが、現在では黄色い自動販売機が広いフロアに何台もおいてあり、日本のクレジットカードも使える。ただし、わかり易いタッチパネルと違い、おでんの「ごぼ天」のようなバーを回して切符の選択をする見慣れないタイプの機械だ。

前回パリに行った時、この「ごぼ天」をクルクルしていたら、「北駅まで行きたいんだけど、買い方を教えてくださいませんか?」と声をかけられた。背が高く、丸い頭に残る白髪とどっしりした鼻がお茶の水博士を思い起こさせる、眼鏡をかけたおじさんで、話し方を見るにフランス人らしい。肩の大きなショルダーバッグが重くてピサの斜塔のように身体が斜めになっている。

しかし毎度思うのだけれど、これだけうじゃうじゃ人があるのに、なぜフランス人はやたらと私に道や時間やらを聞いてくるのだろうか。どう見ても、黒髪醬油顔のアジア人旅行者なのに。これはなにも私に限ったことではなく、フランスにいる外国人は結構な率でフランス人からものを尋ねられるらしい。フランス人によれば「旅行者の方が地図や時計を持っている率が高いから」という一見すると合理的判断に思えるのだが、言葉の問題には無頓着で、

「通じなければ別の人に聞けばよい。」

結局、二度手間じゃん!

「(心が)開いているかどうかで、人種は気にしないんだよ。」

さすが自由・平等・博愛を掲げる国だけある。

おじさんに自販機の画面操作をやって見せて買い方を教えたのだが、私が「ごぼ天」を回し出すとパニックに陥った彼は、最終的に「お金を渡すから代わりに買ってくれ」と言い出した。しかし、目的地は「パリ市内」一択(RERだとパリ市内はどこで降りても均一)なのを見て、「いや、僕は北駅までの切符が欲しいんだ」とごねる。いやこれしかないんです、いや北駅が、と、あまりにもわからずやなので、思わず

「Écoutez monsieur, vous allez au guichet, là! (そんならもう窓口に行ってくださいよ、あっち!)」

パリに降り立ち僅か10分でフランス人にキレてしまった。おじさんは、「あ、窓口あったの、あ、そ。なーんだ。ありがとね。」と、まるでへこたれた様子もなく、そそくさと窓口へ向かった。

フランス人はなぜ、わざわざ外国人にものを尋ねて、なのにその言うことを信用しないのだろうか。

事務局長通信

今年私は還暦を迎えましたが、早いものでもう2014年が終わってしまいます。時間の経過を早く感じるのは今年も様々なイベントがあったからでしょう。



3月にナント剣道愛好家歓迎会のメンバーが来新されて、協会の有志と交流を深めました。以前も新潟を訪問して顔なじみの方もいらっしゃいました。日本人よりも日本の武術の心を愛する彼らは、毎日剣道の練習に明け暮れていたようでした。

4月にラ・フォル・ジュルネでキッズプログラム人形劇を担当したことは他でも紹介されていると思いますが、何と我が協会にはその道のプロが多いことか。そんなプロのメンバーが力を合わせてやった結果、人形劇も大成功に終わりました。

5月にイギリスのヘンリー・オン・テムズで資格取得の研修に行きまして。ヘンリー・ロイヤル・レガッタというボートレースが開催されることで有名なロンドンからテムズ川の上流60キロぐらいの所に位置します。ボートマスからフランス行きのフェリーが出ているようなので、今回はチャレンジしてみようと思います。

7月の革命記念日にはクリスチャン・マセ大使の離任が発表されました。またこの夏の異動ではマリ=クリ

スティヌ・デビド=田中副領事がヴァヌアツという南太平洋の島に領事として転任されました。異動が発表されて、4月理事会に出席していただきました。その時のご挨拶は日本語で新潟への思いを沢山語られて感動的でした。去る人もいれば新しいであいもあります。

9月にはティエリー・ダナ大使が赴任されました。まだお会いしておりませんが、外務省に入省されたのですが、日本に赴任される前の肩書きはコンサルティングを行う民間企業を経営されていたと言うことです。お会いできるのを楽しみにしています。

同じく9月に映画監督としてカリーム・ブージュール氏がナントから来られました。



12月よりナント大公で開催されるマンガ展で、日本マンガ・アニメ専門学校の生徒さんがナントを舞台にした作品を展示するので、その作成過程をドキュメンタリーとして紹介する映画を作成するのが来新の目的です。ここでも繋がりが広がってだんだん太くなっていきますね。

新しいメンバーも増えて益々盛りだくさんな新潟・フランス協会のイベントを楽しんでいただければと思います。

事務局長 萱場 和彰

入会のお誘い

URL : <http://anfrance.com/>

年会費／個人会員 5,000円 学生会員 3,000円 法人会員 30,000円

申込先／事務局または各会員へ 事務局：丸屋本店内 TEL・FAX 025 (225) 2424

〈ANFカード特典利用〉

フランス協会に入会していただくと、ANFカードをお渡し致します。そのカードを提示して、法人会員さま各社各店舗で特典が得られます。特典一覧(2010年2月14日現在)は新潟・フランス協会ホームページをご確認ください。ただし、サービス内容が変更の場合もございますので、各店舗にて最新情報をご確認の上、ご利用下さい。



フランスの美しい村々 2015 年カレンダー

Les Beaux Villages de France Calendrier 2015

Les Beaux
Villages de
France
calendrier 2015

法人会員(株)グラムスリーでは、フランスで最も美しい村協会(L'Association des Plus Beaux Villages de France)とともに、フランスの村々の魅力を日本に紹介する事業をおこなっております。その1つが bon voyage.jp (<http://bonvoyage.jp>) という Web サイトです。今回、この村々の魅力を更に知っていただくために、美しい風景を素材にしたカレンダーを作成いたしました。

フランスの村々を日本に紹介するという日仏の架け橋的なお仕事なので、パリで活躍されている日本人の写真家の方に撮影してもらうのが一番いいだろうと考えていました。そんな折、昨年新潟・フランス協会パリ支部発足時にパリ支部会員として、式典のスチール撮影を行っていた澤田さんと出会ったのです。澤田さんにその日のうちにこの構想をお話しました。そして、澤田さんからフランスの風景を撮影した素敵な作品を見せていただき、即この件をお願いしました。

1月～12月まで、大変に美しい風景の村々です。それを澤田さんがそれぞれの特徴を活かしながら素敵な写真にしてくださいました。どの村もオススメなのですが、中でも6月の Gordes は私のお気に入りの村です。

制作：株式会社グラムスリー
(代表：坂本明)

撮影：澤田博之 岡聖子
佐藤千穂

デザイン：CALELABO (Studio Tub Co.,Ltd)

【(株)グラムスリーについて】

お客様の商品やサービスを幅広く世の中に伝えていくプロモーションを専門的に行うPR会社です。私自身かつてフランスに留学していたこともあり、クライアントにはフランス企業もあります。フランスの美しい村協会の日本でのPR活動窓口となっているのもそのためです。

【カメラマン 澤田博之氏紹介】

1968年生まれ、柏崎市出身

1994年から渡仏、日本との往復

1999年 ニュージーランドのオークランドの
学校でアート一般を短期学習

2001年 フランスで写真再開

2003年 ファッションや報道関係の写真を
始める

2007年 結婚式の写真を加える

11月のKaysersbergの写真が好きです。少しでもきれいに撮れるように、その時間を待ちながら、かつ必要なカットを押さえて行く点に気を遣いました。